

ミュージック・シアター「おてんば」

時空を超えて日本とオランダ、インドネシアを繋ぐ壮大な物語

2025 年 6 月 19 日 オランダ・フェスティバルで世界初演！



「ピーテル・クノール、コルネリア・ファン・ナイエンローデ、その娘たちと 2 人の奴隷召使の肖像」
(ジェイコブ・コーマン、バタビア、1665 年) アムステルダム国立美術館所蔵

制作： **theater
ADHOC** シアター・アドホック

後援：  オランダ王国大使館

日本事務局：  株式会社カインアート

= 目 次 =

ミュージック・シアター「おてんば」

公演について	2 頁
クリエイティブ・チーム&出演者 公演予定（オランダ）	3 頁
物語あらすじ	4 頁
出演者 プロフィール	5～9 頁
プロフィール（出演者、クリエイティブ・チーム）	9～13 頁
ヤン・ファン・デン・ベルグ監督のメッセージ／企画意図について	14～18 頁

【ミュージック・シアター「おてんば」公演について】

脱植民地化と女性の権利の光を浴びて、女性たちの物語が紡がれる

女性のたくましさや自由な精神を祝福する『おてんば』は、観る者の心に深い感動を刻むと同時に行動の変化を促します。

ミュージック・シアター「おてんば」は、女性の不屈の精神と、被植地的な思考からの脱却、他者の立場から見た自分と、自身が思う自己との葛藤と対峙を描いたオランダ・日本・インドネシアの合作・新作オペラです。

日本の伝統芸能、能とクラシック音楽とのコラボレーション。時代を超えて日本とオランダ、インドネシアを繋ぐ物語が語られます。

日本、オランダ、インドネシアは、それぞれ独自の文化と歴史を持ち、特にオランダとインドネシアは、植民地と宗主国の関係にあったという歴史的背景を共有しています。

本公演は、日本、インドネシア、オランダなど、多様な文化圏出身のメンバーで構成され、音楽、言語、動き、演劇といった様々な表現手段を通じて、異なる国の文化や歴史が複雑に絡み合い、登場人物たちの行動や思考に深く影響を与える構成になっています。

物語は、17 世紀に実在した日本とオランダの混血児、コルネリア・ファン・ナイエンローデと、現代のインドネシア人女性、キラナ・ディア（架空）が、時空を超えて出会い、夜通し語り合うことから始まります。異なる時代と文化の中で生きてきた二人は、女性としての強さや、植民地主義の影響といった共通のテーマを軸に、人工知能（スキャン・ロボット）の媒介のもと、それぞれの視点と経験を共有し、新たな未来を切り開いていきます。

本公演は、歴史的事実の再現にとどまらず、現代社会における多様性やアイデンティティの問題を深く掘り下げています。時間、空間、国境を超えた交流を通して、皆さまが異なる文化や背景をご覧になり、新たな見方を発見する機会をご提供いたします。



長崎県平戸市にあるコルネリアの碑

【ミュージック・シアター「おてんば」 全1幕（約70分）クリエイティブ・チーム&出演者】

◎＜クリエイティブ・チーム＞

作 曲： 望月 京（みさと）（日本）
台本・ドラマツルギー： ジャニン・プロフト（オランダ）
アートディレクション・監督： ヤン・ファン・デン・ベルグ（オランダ）
照明デザイン： ヘ・ウェフマン（オランダ）
衣 装： リサ・コンノ（日本／オランダ）
振 付： ロシャナク・モロワティアン（アイルランド／オランダ）
映 像： ジャスパー・カイザー・

◎＜出演＞

コルネリア・ファン・ナイエンローデ： 青木涼子、能声楽家（日本）
キラナ・ディア： ベルナデータ・アスターリ、ソプラノ（インドネシア／オランダ）
スキャニング・ロボット： ミハエル・ヴィルメリング、バリトン（オランダ）
指 揮： 阿部加奈子、指揮（日本）
演 奏： ニュー・ヨーロピアン・アンサンブル（EU）
Flute, Clarinet, Flugelhorn, Trumpet, Harp, Percussion, Violin, Cello

◎公演スケジュール(予定)

2025年6月19日・20日・21日 オランダ・フェスティバル 初演（3公演）
2025年11月 オランダ・ツアー（6公演）
シャッセ・シアター（ブレダ）
フレデンブルク（ユトレヒト）
デ・ドゥーレン（ロッテルダム）
アマレ（デン ハーグ）
デ・フェレーニギング（ナイメーヘン）
オースターポート（フローニンゲン）

◎＜企画制作＞

制 作： シアター・アドホック財団、ニュー・ヨーロピアン・アンサンブル、ホランド・フェスティバル
事 業： オンノ・エフライム（シアター・アドホック財団）

【歴史と未来が交錯する革新的な“ミュージック・シアター「おてんば」”】

【物語あらすじ】

1. 邂逅と対話

アムステルダム国立美術館。17 世紀の絵画修復作業に没頭するインドネシア人の若き修復家、キラナ・ディア。その目の前に、絵画から抜け出した女性、コルネリア・ファン・ナイエンローデが現れる。コルネリアは、日本とオランダの混血児であり、自身の絵画の中に閉じ込められた過去と、現代を生きるキラナとの間に奇妙な共鳴を感じる。

二人は、絵画修復室で夜通し語り合う。コルネリアは、女性としての強さ、植民地時代の経験、そして「オッテンバールヘイド（不屈の精神）」という概念を熱く語る。キラナは、現代社会における女性の地位、多文化社会でのアイデンティティ、そしてスキャンロボットという最先端技術との共存について、自身の考えを述べる。二人の対話は、次第に白熱し、それぞれの過去と未来、そして世界のあり方について探求していく。

2. 過去と未来の交錯

コルネリアとキラナの対話を通して、二人はそれぞれの背景に共通点と相違点を見出す。異なる時代、異なる文化の中で生きてきた二人だが、女性としての経験や、社会からの期待、そして自己探求という普遍的なテーマを共有している。スキャンロボットは、二人の対話を客観的に分析し、二人の間に存在する共通点と相違点を可視化する。ロボットの分析は、二人が自分自身を他の視点から深く見つめ直すきっかけとなる。

3. 決断と新たな未来

夜が明け、コルネリアは再び絵画の中へと戻っていく時が来る。しかし、キラナとの出会いは、コルネリアに新たな視点を与えた。彼女は、過去にとらわれることなく、未来に向かって歩み出す決意をする。一方、キラナもまた、コルネリアとの対話を通して、自身のアイデンティティと未来について新たな気づきを得る。二人は、それぞれの道へと進むが、その心に生まれた繋がりは決して消えることはない。この一夜限りの出会いは、二人の人生に大きな影響を与え、新たな未来を切り開くための力となる。

【出演者 プロフィール】

◎青木涼子（能声楽）

<https://ryokoaoki.net/>

 <https://www.youtube.com/c/RyokoAoki/featured>

能の「謡」を現代音楽に融合させた「能声楽」を生み出し、現代の作曲家を惹きつける「21 世紀のミューズ」。ペーテル・エトヴェシュ、細川俊夫らこれまでに世界 20 カ国 55 人を超える作曲家たちと新しい楽曲を発表。2013 年 ジェラルド・モルティエに見出され、テアトロ・レアル王立劇場にてヴォルフガング・リーム作曲《メキシコの征服》（ピエール・オーディ演出）のマリンチェ役での衝撃的なデビューを皮切りに、現代音楽の本場ヨーロッパを中心に活動。

2017 年パリの秋芸術祭、ケルン・フィルハーモニーにて細川俊夫作曲、平田オリザ台本の室内オペラ《二人静—海から来た少女—》をアンサンブル・アンテルコンタンポランと共に世界初演を行った。その後、トロント、韓国・トンヨン国際音楽祭、ニューヨークにて、それぞれ別演出のプロダクションにも出演。2019 年ペーテル・エトヴェシュ「くちづけ」をスウェーデン、エーテボリで世界初演後、ベルリン・フィルハーモニー、東京文化会館、ポルト、マドリード、ケルン、ブダペストで再演を行った。他にもロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、フィレンツェ五月音楽祭管弦楽団、ミュンヘン室内管弦楽団などのトップオーケストラにソリストとして招聘され共演している。



国内において自ら主催する新曲委嘱シリーズ「能×現代音楽」を 2010 年より毎年開催し、2014 年にデビューアルバム「能×現代音楽」(ALCD-98)をリリース。コロナ禍においては世界の演奏家とリモート演奏する YouTube ライブ「能声楽奉納」をイタリア、フランス、スペイン、オランダ、ドイツと 5 回実施し、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、アンサンブル・ムジークファブリークと共演し、ヨーロッパのテレビ局 Arte の人気番組「Hope@Home」に取り上げられるなど、国内外で話題になった。

東京藝術大学音楽学部邦楽科能楽専攻卒業（観世流シテ方専攻）。同大学院音楽研究科修士課程修了。「女性と能」の研究でロンドン大学東洋アフリカ学院博士号取得。2015 年度文化庁文化交流使。2019 年度第 11 回「創造する伝統賞」（公益財団法人日本文化芸術財団）受賞。

2021 年「サントリーホール サマーフェスティバル 2021」にてアンサンブル・アンテルコンタンポランと細川俊夫《二人静—海から来た少女—》を日本初演。アンテルコンタンポランのチェリスト、エリック＝マリア・クテュリエとリモート録音したセカンド・アルバム「夜の詞」(ALCD-131)をリリース。2022 年にマドリードにてスペイン国立管弦楽団と初共演。2024 年にロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団に再び招かれ、好評を博した。
世界からのオファーが絶えない、現代音楽で最も活躍する国際的アーティストのひとり。

演劇公演や小規模なリサイタルなど、幅広いジャンルで活動するアスターリは、意味のある、物語を語る公演に取り組むことを楽しんでいる。彼女の多才さと音楽、言語、演劇への強い関心は、インドネシアでの幼少期にまで遡り、これらすべてが彼女を並外れた歌手、パフォーマーの糧になっている。

アスターリはオランダクラシックタレント、プリンセスクリスティーナコンクール、IVC スヘルトーヘンボス（オランダ）などの名誉ある賞を受賞し 2012 年にユトレヒト音楽院でクラシック歌唱の修士号を優秀な成績で修了、すぐにオペラスタジオネーデルランドのメンバーとして、ネーデルランドライゾペラとヴィーエンファブリークでソリストとしてキャリアをスタートした。



すぐに、ライネローバナのダンスオペラ「LIGHT」などの特別作品で歌い、踊り、演技を披露。ヴォイジャー・ワン、現代主婦のための百科事典、トゥーキ・デルフィーヌとロッテルダム劇場による音楽劇、ドーレン・カルテットとガムラン・アンサンブル・ゲンディングとの共演による現代オペラ「Kill the West in Me」、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団との共演によるニコ&ザ・ナビゲーターズ・ベルリンによるオペラ「Suor Angelica」、また、ボウデウィン・タレンスキーン、シンタ・ウルル、トニー・ブラボウオなど、著名な作曲家との密接なコラボレーションも行っている。

アスターリは歌手およびパフォーマーであるだけでなく、LIBI/ジョジョカルソの「Autumn」や URLAND の「The End Times Revue」など、クリエイターとしての活動も活発化している。さまざまな分野のアーティストと共演し、即興で可能性を探ることを楽しんでいる。次第に自身によるパフォーマンスの創作意欲も高めている。この意欲は、彼女の個人的な背景、経験、人生の歴史から生じているもので自身のトリオ、ベルナデータ・アスターリ・トリオ（ピアニストの井上加奈子とアコーディオン奏者のピーターネル・ベルカースと共演）で、すでに家族向けのパフォーマンス「森のモジー」を制作しており、これはさまざまな学校やフェスティバルで上演されている。

彼女の目標は、観客の心を動かし、音楽と演劇の興味深い世界に導くこと。彼女は、オランダ音楽祭、ノヴェンバー・ミュージック、O. フェスティバル、オーロル、ダウン・ザ・ラビット・ホールなどのフェスティバルを含むあらゆる場所でこれを実現している。

◎ミハエル・ヴィルメリング、バリトン

<https://www.hollandfestival.nl/en/michael-wilmering>

ミハエル・ヴィルメリングはユトレヒト音楽院で優秀な成績で学士号と修士号を取得し、シュトゥットガルトのオペラスタジオで学んだ。

現在はフリーランスの歌手として、オペラ、芸術歌曲、コンサート公演など幅広いレパートリーを持ち、活躍している。オランダ国立オペラでは、魔弾の射手（2022 年オランダフェスティバルで上演）やカルメンなど 15 作品に出演しているほか、専門分野である新作オペラにも毎年出演。

オペラ・ザイドでは、パパゲーノ（魔笛）やジュニア（クワイエット・プレイス）などの役を演じている。さらに、彼は芸術歌曲のレパートリーで国際声楽コンクールを含む数々の賞を受賞しており、「Die Winterreise」などの批評家から高く評価されているアルバムをリリースしている。



Michael Wilmering © Otto van den Toorn⁴

◎ニュー・ヨーロピアン・アンサンブル（NEuE）（アンサンブル）

<https://www.neweuropeanensemble.com/>

<https://www.youtube.com/watch?v=DN89myQdQg&t=5s>

<https://www.youtube.com/watch?v=GFqtvB5KRCA&t=2s>

2009 年にオランダで設立。ヨーロッパ各地の熱心で情熱的な音楽家たちによって結成され、想像力豊かなプログラミングと「素晴らしい」（NRC）および「素晴らしいパフォーマンス」（de Volkskrant）で評判を築き上げており、「オランダを代表するアンサンブル」（Nieuwe Noten）の 1 つと呼ばれている。

2019 年、NEuE は「現代音楽を幅広い聴衆に魅力的かつ分かりやすい方法で紹介する最高レベルの 10 年間の功績」を認められ、Kersjesprijs を受賞。



新しい音楽の伝達力を通じて物語を伝えるアンサンブルとして活動。物語は、人間の経験と環境に対する理解を反映し、挑戦し、刺激を与え、深めることを目的としている。NEuE は、音楽を映画、文学、演劇、ダンス、視覚芸術としばしば組み合わせた演奏を行っており、エドワード・スノーデン、ボリス・ファン・デル・ハム、ニック・フェルスタント、デフレーション、オペラ 2 デイ、オランダ国立劇場、アムネスティ・インターナショナル、国際刑事裁判所、ウォー・チャイルドとコラボレートしてきた。

マーク・アンソニー・ターネージ、ホセ・マリア・サンチェス・ベルドゥ、アンナ・トルヴァルズドットイル、グオ・ウェンジン、カルロ・ボッカドーロ、マルティン・パディング、クラス・トルステンソンなどの作曲家が、NEuE に作品を制作。

オランダ国内ほぼすべて、アムステルダム・コンセルトヘボウ、カレ劇場、ムジークヘボウ・アーン・ト・アイ、ロッテルダム・デ・ドールン、チボリ・フリーデンブルク、ハーグの王立劇場などで演奏。

フェスティバルではガウデアムス音楽週間、フランダース音楽祭、ノヴェンバー・ミュージック、上海新音楽週間、北京現代音楽祭、スヴェンスク・ムジークヴォールなどに定期的に出演。国際ツアーでは、イギリス、ドイツ、ベルギー、スウェーデン、フィンランド、イタリア、レバノン、中国、香港を訪問。NEuE のメンバーは、ハーグ王立音楽院や世界各国の音楽学校で、若い作曲家や演奏家と定期的に活動している。

◎阿部加奈子（指揮）

<https://kanakoabe.com/jp/>

<https://www.youtube.com/watch?v=VHTh7KSEeBk&t=14s>

オランダ在住。東京藝術大学音楽学部作曲科を経て、パリ国立高等音楽院にて作曲に関連する6つの課程とともに日本人として初めて同音楽院指揮科で学び、フォンティス総合芸術大学大学院指揮科（オランダ）にて修士号を取得。

これまでに作曲を永富正之、管弦楽法をマルク＝アンドレ・ガルバヴィ、楽曲分析をミカエル・レヴィナス、ピアノと伴奏法をジャン・ケルネル、指揮をジョルト・ナジ、ヤーノシュ・フルスト、ファビオ・ルイージ、エティエンヌ・シーベンスなどに師事。



パリ国立高等音楽院在学中より、ヨーロッパを活動の拠点に、指揮者、ピアニスト、作曲家として多方面で活躍する。2005年にはパリ管弦楽団やアンサンブル・アンテルコンタンポラン等のメンバーからなる現代音楽アンサンブル「ミルチラテラル」を創設、2014年まで音楽監督を務める。また、その間にチューリッヒ歌劇場やモンペリエ国立歌劇場でファビオ・ルイージ、エンリケ・マツォーラ、ロレンス・フォスター等のアシスタントを務める。これまでにギャルド・レピュブリケーヌ管、イル・ド・フランス国立管、モンペリエ国立管、ロレーヌ国立管など、日本国内では東京フィル、新日本フィル、兵庫芸術文化センター管などと共演している。

2022年7月、ブシュ・エル＝トゥルクのオペラ「Woman at Point Zero」の世界初演でエクサン・プロヴァンス音楽祭、2023年6月にコヴェントガーデン王立歌劇場、2024年5月にウィーン芸術週間に、2025年3月にブシュ・エル＝トゥルクの新作オペラ「OUM」の世界初演でオランダ国立歌劇場にそれぞれデビューを果たす。2024年1月に藤原歌劇団・グノーの歌劇「ファウスト」にて日本・オペラデビューを果たす。

これまでにIRCAMとの提携、ラジオ・フランスへの録音をはじめ、ストラスブール音楽祭、ヴェネツィア国際現代音楽祭などで200曲以上の世界初演の指揮を手がける。また近年では作曲活動にも復帰し、2025年11月には阿部自身の作曲によるオルガン協奏曲（横浜みなとみらいホールからの委嘱）が世界初演される。

作曲家の視点に立った斬新な解釈や情熱溢れる演奏に定評があり、加えて軽妙なトークや波乱万丈の人生を語った読み物でも多くのファンを魅了している。現在、フランス・ドーム交響楽団の芸術監督兼音楽監督、アンサンブル・オロチの創設者兼音楽監督を務める。ハーグ音楽院非常勤講師。

【クリエイティブ・チーム プロフィール】

◎望月京（もちづきみさと）（作曲） <https://www.tokyo-concerts.co.jp/artists/misato-mochizuki/>
 <https://www.youtube.com/watch?v=bMg4Rdf7InA>
 <https://www.youtube.com/watch?v=pPTGFDqzRYI>

1969 年東京生まれ。東京藝術大学音楽学部附属音楽高校、同大学を経て 1993 年同大学院作曲専攻修了。
1995 年パリ国立高等音楽院作曲科、1998 年同科第 3 課程、2000 年同楽曲分析科修了。
1996～97 年 IRCAM（フランス国立音響／音楽の探究と調整研究所）研究員。北村昭、尾高惇忠、間宮芳生、ポール・メファノ、エマニュエル・ヌネス、トリストラン・ミユライユの各氏に師事。

さまざまな領域への関心からもたらされる着想や、繊細さとダイナミズム、多彩な音色とバランス感覚に優れたユニークな作風が各地で注目を集め、ザルツブルク音楽祭、ウィーン・モデルン、ドナウエーゲン現代音楽祭、ヴェネツィア・ビエンナーレ、リンカーンセンター・フェスティバル、サイトウ・キネン・フェスティバル（松本）など、数多くの主要音楽祭等で作品が初演／再演される。各国のラジオ・テレビによる放送も多い。

2007 年ルーヴル美術館の委嘱で作曲された無声映画『瀧の白糸』（1933、監督：溝口健二）のための音楽は、同年のルーヴルでの初演以来、毎年再演を重ね、これまでブザンソン、ストラスブール、東京、スイス、イタリア、オランダ、ルクセンブルクなどで演奏、2019 年はチュニジアでの再演が予定されている。また、パリの秋芸術祭、アルス・ムジカ音楽祭（ブリュッセル）、アムステルダム・ムジークヘボウ、サントリーホール、ニューヨーク・ミラーシアター「作曲家の個展シリーズ」などでは、オーケストラやアンサンブル作品による個展が開催され好評を博す。

その他、代表作として、オペラ《パン屋大襲撃》（ルツェルン劇場、ロンドン・ロイヤル・オペラハウス他共同委嘱）、管弦楽曲《むすび II》（ブザンソン国際指揮者コンクール課題曲）、《むすび》（東京フィルハーモニー交響楽団創立 100 年記念委嘱）、《ニライ》（バイエルン放送響委嘱）、《ニグレドー R.シューマン讃－》（新日本フィルハーモニー委嘱）、《インスラオヤ》（サントリー音楽財団委嘱）、《クラウドナイン》（NHK 交響楽団委嘱）、《メテオリット》（読売日本交響楽団委嘱）、《ホメオボックス》（ベルリン・ムジークビエンナーレ委嘱）、《カメラ・ルシダ》（SWR 南西ドイツ放送局委嘱）、弦楽四重奏曲《Brains》（ラジオフランス委嘱）、《Boids》（クロノスカルテット委嘱）、《赤い大地》（フランス文化省委嘱）、アンサンブル作品《キメラ》《ワイズ・ウォーター》（ともに WDR 西ドイツ放送局委嘱）、《4 D》（フランス文化省委嘱）など。最近作に、共通善経済をテーマにした《パントポス》（ビデオとアンサンブル）、アイデンティティの問題をとりあげた《Têtes》[顔／頭]（歌手とアンサンブル）がある。

講演や作曲の講師として招聘されることも多い。これまでに、ダルムシュタット国際夏期講習会（ドイツ）、ロワイヨモン国際作曲セミナー、コレージュ・ド・フランス、ニューヨーク・コロンビア大学、アムステルダム音楽院、カタロニア高等音楽院（ESMUC）、Mixtur フェスティバル（バルセロナ）、ニース・C I R M（国際音楽研究センター）、パリ・エコール・ノルマル音楽院、ウィーン芸術写真学校、ア・テンポ音楽祭（ベネズエラ）、武生国際音楽祭等で講師を務める。2011～2013 年にはブザンソン国際音楽祭コンポーザー・イン・レジデンスとして指揮者コンクール課題曲作曲および審査のほか、地域の大学、音楽院、美術学校などでの講演やワークショップ、演奏会を数多く行った。

1995 年第 64 回日本音楽コンクール作曲部門第 1 位及び安田賞、1998 年ダルムシュタット・シュティペンディエン賞、1999 年ユネスコ国際作曲家会議推薦曲（パリ）、2000 年芥川作曲賞、2002 年アルス・ムジカ音楽祭聴衆賞（ブリュッセル）、2003 年芸術選奨文部科学大臣新人賞、出光音楽賞、2005 年尾高賞、2008 年ユネスコ国際作曲家会議グランプリ（ダブリン）、2010 年ハイデルベルク女性芸術家賞受賞。

作品は Breitkopf&Härtel 社より出版、CD 作品集が Kairos（2002 年）、Neos（2014 年）の各レーベルよりリリースされている。

現在、明治学院大学文学部芸術学科教授、東京藝術大学音楽学部作曲科客員教授。

劇作家、作家、演劇、オペラ、ダンスの翻訳家。アムステルダム大学（UvA）で演劇と英文学を学んだ。アムステルダムのトーンエルグループ、ハンブルクのカンパナーゲル・インターナショナル・カルチュアファブリック、南トーンエルグループで劇作家および芸術顧問を務めた。

彼女が高く評価されている翻訳には、シェイクスピア、ラシーヌ、ゲーテ、オニール、ミラー、ベルンハルト、ピンター、クリンプなどの作品がある。彼女は、演出家のイヴォ・ファン・ホーヴェ、ピエール・オーディ（国立オペラ座）、ヘラルドジャン・ラインダース、振付師テッド・ブランドセン（オランダ国立バレエ団）と幅広く仕事をしている。

ユトレヒト大学とアムステルダムの芸術大学で教鞭をとり、アムステルダムの王立音楽学校では、王立音楽大学の芸術顧問も務めた。

ミュージカル劇場への愛から、オペラの台本も書き、国立オペラ座で上演された「ラーフ」と「ミス・モンローを待ちながら」は作曲家ロビン・デ・ラーフのために、また「ペルシア人」と「マンネツェ・ヤス」はボウデヴィン・タレンスキーンのために書いている。バレエの台本には、新版の「コッペリア」と「マタ・ハリ」のオリジナル台本があり、どちらもオランダ国立バレエ団の芸術監督で振付師テッド・ブランドセンのために書きたものである。最新のバレエ台本は、パースの西オーストラリアバレエ団の『Echoes of Vincent』（2023 年）で、振付師はウブキエ・クインデルスマ。演劇では、当時アムステルダムのトーングループ（現在は ITA）で演出家のジェラルジャン・ラインダースと共同で手がけた 100 回弱の公演があり、その中には『メディア』、『リチャード 3 世』、『マクベス』、『ダーク・レディ』、そしてシアタービューロー・ファンメルン・ストウールマンでチェーホフのシリーズ『かもめ』、『ワシントンおじさん』、『チェリーガーデン』などを手掛けた。

オペラでは、イヴォ・ファン・ホーヴェの『ヴェック・マクロプロス』、『イオランタ』（ドイツ国立歌劇場）、ワーグナーの『ニーベルングの指環』（フランドル歌劇場）、『イドメネオ』、『皇帝ティートの慈悲』（ドイツ国立歌劇場）、『マゼッパ』（ベルリン・コーミッシェ・オペラ）およびリヨンでのヴェルディの『マクベス』などがある。

彼女の多彩な作品は、マタ・ハリ、マリリン・モンロー、詩人ヴァサリスなど、並外れた女性たちに焦点を当てている。

1961 年生まれ。神学、哲学、演劇学、演劇監督を学ぶ。1988 年以来、シアター・アドホックの名のもと、50 を超える国内外の演劇・映画プロジェクトを制作。その中には、ドキュメンタリー映画「HIGGS - Into the Heart of Imagination」（スイスのジュネーブに拠点を置く、世界最大かつ最も尊敬される科学研究センターの 1 つである欧州原子核研究機構（CERN）との共同制作）などの受賞作品も含まれている。

アムステルダム芸術大学の演劇・ダンスアカデミーの演劇監督科で教鞭を執る。マーストリヒト演劇アカデミーの客員講師。オペラ「おてんば」はオペラ監督としてデビュー作。2022 年には「最後の人間コンピューター、ウィム・クライン」（「伝説の天才オランダ人暗算師についての豊かな演劇コンサート」）など、さまざまなミュージカル作品を手掛けている。

◎ヘ・ウェフマン/スタジオ HB (照明デザイン) <https://www.operabase.com/ge-wegman-a100729/en>

 <https://www.youtube.com/watch?v=pPTGFDqzRYI>

1957 年生まれ。オランダの照明デザイナー。また、パントマイムの制作会社であるヴェーム劇場の共同設立者であり、常任の照明デザイナーも務めた。

アムステルダムのアイ川沿いにあった不法占拠ビル、ヘット・ヴェームの上階を定期的に訪れたウェフマンは、そこで行われていたあらゆる種類のイベントや文化活動を目の当たりにしたことが 1986 年のヴェーム劇場設立に結実した。現在はベルビュー劇場のディレクターを務めるジャネット・スミットが公演をプロデュースし、ウェフマンはミヒール・ファン・ブロックランド（1998 年に死去）と共同で劇場のレイアウトと技術を担当した。

彼らはこの劇場を劇場技術の実験室のようなものになろうと考えていた。つまり公演を思った通りに創り込める場所であり、技術者になるための十分な学習ができる場所である。この姿勢は、ヴェーム劇場が採用したプログラムの方向性、つまりパントマイムに密接に関係していた。今日に至るまで、ヴェーム劇場はオランダにおけるパントマイムの中心地である。

ウェフマンは 1984 年からはモニエク・メルクスと仕事をしており、Theatre Group Max の常連照明デザイナーを務める。また、Het Nationale Toneel、Toneelgroep Maastricht、Theatregroep Carver、Boogaerdt / Van der Schoot、Mathilde Santing、Theo Nijland など、数多くの監督、グループ、ワークショップと仕事をしている。

2010 年には、マーク・ワーニング、アリエン・デ・フリースとともにトニールグループ・オーストプールと共同で制作した『Van de brug af gezien』の作品でワインベルク舞台芸術賞を受賞。

◎リサ コンノ (衣装デザイン) <http://www.lisakonno.com/home/>

2014 年 Artez のファッションデザイン科を卒業、アムステルダムを拠点とするアーティスト兼（衣装）デザイナー。ファッション業界において一般的なファッションデザイナーと異なる道を歩むことを目指し、デザインを利用して社会的な課題やストーリーを伝えるプロジェクトに取り組んでいる。

2015 年に、ファッション業界の非倫理的な慣習について声明を出す、業界の廃棄物からのコレクションを作ることから活動を開始。「For The Workers」（2015 年）や「Yours Truly」（2016 年）などのコレクションは、アムステルダム・ファッション・ウィークで発表した。その他、「Collect」などの展示会は、オランダのデザイン・ウィークや東京デザイン・ウィークで展示された。2018 年にダッチ・デザイン・アワードのタレント賞を受賞。

日本の父親を様式化した肖像画を描いた短編映画「NOBU」（2018 年）の制作以来、映画制作は彼女にとってファッションを通して物語を表現する場となり、ファッションは普遍的なテーマを語る非常に個人的な物語を描くツールとなっている。その作品は、ドキュメンタリー、ファッション、陶芸、パフォーマンスなど、さまざまな領域に自由に行き来している。これらの多分野にわたる作品は常に服やテキスタイルへの深い愛情によって結びついており、人間が作品の中心となっている。

「NOBU」に続き、「BABA」（2019 年）、「HENK」（2022 年）が公開された。また、衣服寄付の実態を暴くドキュメンタリー「Goodwill Dumping」では、ファッションとコンセプトを監修。

作品に繰り返し現れるテーマは、文化的アイデンティティ、持続可能性、そして活動主義である。その作品は、IFFR、クルモン・フェラン、アムステルダム・ファッション・ウィーク、東京デザイン・ウィーク、ダッチ・デザイン・ウィーク、パリ・ファッション・ウィークなどのプラットフォームで発表されており、ハーグ美術館やユトレヒト中央美術館のパーマナント・コレクションに収められている。これらショーケースのほか、彼女はアムステルダム国立美術館、オランダの放送局 VPRO、デ・バイエンコルフ、ヘット・トロペンミュージアムなどのクライアントのために仕事をしている。最近では、有田（佐賀県）でのクリエイティブ・レジデンスに招待され、ここで自身の日本とオランダの伝統、特に両文化における女性の美の基準と、これらがしばしば矛盾していることにイン

スピレーションを受けたという。一連のビーズ、結び目、装飾品を制作し、現在、それらをテキスタイルと組み合わせて、縛りの技法にインスピレーションを得たエプロンを制作中。ほかにも、女性の歯を黒く塗るという日本の古い伝統にインスピレーションを得た磁器の歯のグリルを制作。

AWARDS

2020 Aesthetica Film Festival UK - Best Fashion Film (BABA)

Amsterdam Fashion Film Festival - Best Fashion Film (BABA)

Leiden Shorts - Best Documentary (BABA)

Wellington Film Festival - best short doc (Goodwill Dumping)

SIMA Awards - best short doc. (Goodwill Dumping)

2019 Court Metrage de Lille - Audience Award (NOBU)

Sapporo International Film Festival (NOBU)

Szczecin Film Festival - Audience award (NOBU)

Rotterdams Open Doek Film Festival - Audience Award (NOBU)

2018 Dutch Design Award, Young Designer Award

◎ロスハナク・モロヴァチアン（振付）

<https://www.ickamsterdam.com/en/artist-space/artists/roshanak-morrowatian-114>

 <https://www.youtube.com/watch?v=wyU0UmeL6ew>

振付師、ダンサー、パフォーマー。ドイツのエッセンにある Folkwang 芸術大学でダンスの学士号とダンス作曲の修士号を取得。モダンダンスを学んだ後、ロシャナックは国内外でフリーランスのダンサーおよびパフォーマーとして活動。マリーナ・アブラモヴィッチ、ピナ・バウシュ、イザベル・ベールナールト、ウィリアム・サンチェス、ヨースト・ヴルーエンラーツ、アレクシス・ブレイク、ボディートク/脇好子などの作品に出演。ウィリアム・アルザバリやジュリー・サンドの映画や、マエル・ポエジーのパフォーマンス「Sous d'Autres Cieux」にも出演。

振付師として、例えば、シュリットマチャーフェスティバル、トーンラアカデミー・マーストリヒト、SALLY Dansgezelschap Maastricht、ワールドミュージックコンクール、自身のカンパニー「Rover」の作品を制作。2018 年、ロシャナックはエドモンド・フスティンクス財団からスターター賞を受賞し、2020 年には泉麻美との共演作品「ポリッシュド」で BNG バンクダンス賞、ダンスソロ「カイツ」でダッチダンスデイズ賞を受賞した。2022 年には「ザ・ネクスト！」奨励賞にノミネート。

2018 年から 2021 年まで、タレント育成組織 VIA ZUID の支援を受け、2023 年からはパフォーミングアーツ基金 NL の「ニューメーカーズレグリング」に参加している。この 2 年間のプロセスの主なパートナーおよび申請者は、ICK ダンスアムステルダムで、パートナーは、DOX、コルゾ、パークスタッド・リンブルフ劇場、VIA ZUID。より調和のとれた社会への願いは、ロシャナックの作品に共通する糸のように流れており、彼女のパフォーマンスでは、気づかれない細部、目に見えない人々、忘れられた物語が主役を演じている。アイデンティティ、境界、帰属意識などのテーマを中心とする学際的なパフォーマンスアーティストとして、記憶の物理的性質、伝統の流動性、離散的アイデンティティを探索し続けている。

【ヤン・ファン・デン・ベルグ監督のメッセージ／企画意図について】

【プロジェクトの目的】

1. 独自の芸術性：新たな表現の創造

このプロジェクトの最大の目標は、音楽的にも内容的にも革新的な、独創的なオペラを創出することです。既存の枠にとらわれない、新たな表現に挑戦し、観客に忘れられない感動を届けたいと考えています。



© Photography: DigiDaan

2. オランダから世界へ：国際的な舞台へ

オランダ国内での公演はもちろんのこと、日本やインドネシアでの公演も視野に入れており、国際的な舞台での活躍を目指します。特に、コルネリア・ファン・ナイエンローデゆかりの地である日本での公演は、歴史的な背景との繋がりを深め、作品の意義をさらに高めるものと期待されています。この目的のために、ジャカルタのエラスムス劇場や、カイルンアート株式会社（内倉眞紀子代表）の協力のもと、日本のさまざまなパートナーとすでに連絡を取り合っています。シアター・アドホックは、在日オランダ大使館、平戸の松浦歴史博物館（コルネリア・ファン・ナイエンローデの生誕地）とも良好な関係を維持しており、いずれも日本での公演実現に協力を約束しています。

3. 教育を通じた社会貢献：多文化理解の促進

オペラを通じた教育プロジェクトを実施することで、オランダ、日本、インドネシアの複雑な歴史的・文化的関係を再考し、より多角的な視点から世界を見つめることができる「考える材料」を提供します。特に、脱植民地化というテーマは、現代社会においても重要な課題であり、このオペラは、観客に新たな視点を与えるきっかけとなるでしょう。

【オペラのテーマ】

- **女性の不屈の精神：**時代や文化を超えて、女性たちが持つ強さやたくましさ
- **視線の脱植民地化：**植民地主義の影響から脱し、新たな視点で世界を見つめること
- **他者の目と自分自身の目：**他人からどう見られているかではなく、自分自身でどうありたいか
- **多様性とアイデンティティ：**異なる文化や背景を持つ人々が共存する社会

【このオペラが目指すもの】

このオペラは、単に美しい音楽やドラマを楽しむだけでなく、観客に考えさせ、行動を促すきっかけとなることを目指しています。

- **多文化理解の促進：**異なる文化や背景を持つ人々に対する理解を深める
- **女性のエンパワメント：**女性の地位向上を促す
- **グローバルな視点の育成：**世界の様々な問題に対して、より広い視野で考える

【登場人物と物語の深層】

「おてんば」は、単なる歴史ドラマではなく、現代社会が抱える普遍的な問題を深く掘り下げた作品です。異なる文化や時代を生きる人々が、互いの違いを認め合い、共存していくことの大切さを教えてくれます。

このオペラを通して、観客は自分自身と世界との関係について新たな視点を得ることができるでしょう。

1. コルネリア・ファン・ナイエンローデとキラナ・ディア：二つの時代、一つの魂

17 世紀の実在の混血女性“コルネリア”と、現代の美術史家“キラナ”。異なる時代、異なる文化を持つ二人は、ある一点で強く結びついています。それは、所属できないという孤独感、そして自分自身のアイデンティティを模索する苦しみです。コルネリアは、混血というだけで日本から追放され、離婚訴訟で女性としての権利を主張したために中傷されました。キラナは、植民地時代の傷跡を背負うインドネシアの絵画を修復しながら、自国の歴史と向き合っています。

2. スキャンロボット：第三の登場人物、そして新たな視点

スキャンロボットは、二人の女性を繋ぐ媒介となるだけでなく、物語に新たな視点をもたらします。人工知能としての客観的な視点から、二人の歴史や感情を分析し、新たな発見を促します。

3. 魔法のような出会い：時間と空間を超えて

アムステルダム国立美術館という舞台で、二人の女性とスキャンロボットが出会う瞬間は、まるで魔法のようです。過去と現在、現実と仮想、人間と人工知能が交錯し、時間と空間の概念すら揺らぎます。この出会いは、単なる偶然ではなく、二人が抱える孤独感やアイデンティティの危機を癒すための必然的な出来事と言えるでしょう。

4. 修復作業：過去と未来を繋ぐ架け橋

キラナにとって、絵画の修復は単なる作業ではありません。それは、植民地時代の過去と向き合い、自国の歴史を再解釈する旅です。コルネリアにとって、修復は、自分自身の存在意義を問い直し、未来への希望を見出すためのプロセスです。

5. 多様性とアイデンティティ：一つの答えを探す旅

コルネリアとキラナは、それぞれ異なる文化や歴史の中で生きてきましたが、共通の悩みを抱えています。それは、多様なアイデンティティを持つ中で、自分自身をどのように受け入れるかという問題です。このオペラは、私たち一人ひとりが抱えるアイデンティティの複雑さを描き出し、多様な価値観が共存する社会のあり方を問いかけています。

6. スキャンロボットの問い：人間と人工知能の共存

スキャンロボットは、人間と人工知能の関係についても考えさせます。人工知能が人間の感情や創造性を理解できるのか、それとも永遠に隔てられた存在なのか。このオペラは、私たちがこれから生きていく社会において、人間と人工知能がどのように共存していくのかという問題を提示しています。

【創造の舞台裏】

歴史からのインスピレーション、科学、音楽、舞台、照明、美術、衣装。これらの要素が組み合わさることで、オペラ「おてんば」は、視覚的に美しく、かつ感情豊かな舞台空間を実現しています。この舞台を通して、登場人物たちの心の動きに共感し、物語の世界に深く浸っていただくことができます。

1. 変化の管理：修復と創造の境界線

絵画の修復は、単なる修復にとどまらず、私たちが歴史をどのように捉え、未来を築いていくかという問いかけを含んでいます。修復のプロセスは、作品そのものだけでなく、私たち自身の価値観や歴史認識をも変化させる力を持っています。特に、スキャンロボットという最先端技術の導入は、修復作業に新たな可能性をもたらすと同時に、倫理的問題も提起します。過去の痕跡をデジタルデータとして残すことで、私たちは作品をより深く理解できる一方で、オリジナルの持つ「生きた質感」を失ってしまうのではないかという懸念も生まれます。

2. 歴史からのインスピレーション：コルネリア・ファン・ナイエンローデの物語

オペラ「おてんば」は、アムステルダム国立美術館所蔵の絵画、「ピーテル・クノール、コルネリア・ファン・ナイエンローデ、その娘たちと2人の奴隷召使の肖像」（ジェイコブ・コーマン、バタビア、1665年）に描かれた女性、コルネリアの驚くべき生涯にインスピレーションを得たものです。1665年、ピーテル・クノールはバタビアの「最初の首席商人」でした。この絵は彼の富を証明しています。コルネリア・ファン・ナイエンローデは、日本人女性スリシラと、日本で最初の東方貿易拠点であった平戸のオランダ人商人の娘でした。

「おてんば」は、日本語がオランダ語から借用した160以上の単語のうちの1つで、「不屈の」「飼いやられられない」を意味します。この言葉は、性別に特化して、独立していて服従せず我が道を行く少女や女性に対して使用されます。コルネリア・ファン・ナイエンローデは、17世紀のバタビアで、女性としての権利を主張し続けた不屈の女性でした。コルネリアは23歳でバタビアのVOC首席商人ピーター・クノールと結婚しました。20年後、ピーターは亡くなりました。彼は遺言で、コルネリアを全財産の相続人兼管理者に任命しました。4年後、彼女はオランダ人弁護士のジョアン・ビッターと再婚しましたが、これが悲慘な間違いでした。ビッターはコルネリアの財産を狙っていました。そのことに気がついたコルネリアは、すぐに離婚を申請しました。これは当時の女性としては非常に異例なことでした。しかしながら、当時は女性の力が認められていなかったため、ビッターは彼女から家も含め、多額の金を奪いました。彼女は15年近く、ビッターとVOC当局と戦い続け、60歳近くになると、人生で初めてオランダに渡り、最高裁判所で訴訟しました。女性が経済的自己決定権（自分の資産について行動する法的能力）を主張した最初のオランダの離婚訴訟でした。

彼女の故郷である長崎県平戸市には、彼女を記念する塔が建てられており、地元の平戸オランダ商館（松浦歴史博物館）には、オランダ国立美術館にある絵の複製以外にもうひとつコルネリアに関するものが展示されています。それは、彼女が母親に書いたジャカルタからの手紙です。～「追伸 - 近年、奴隷の若者の身元についてより確かなことが明らかになってきた」～＊
コルネリアの生涯は、植民地主義、ジェンダー、そして個人の自由といった、現代社会においても重要なテーマを孕んでいます。彼女の物語をオペラという形で再解釈することで、私たちは過去から学び、未来への教訓を得ることができます。

＊クノール家の旗を持った集合写真の背景に描かれているのは、ウントウンです。この絵が描かれた当時、彼は「バタビアで最もシックな通り、ティガースグラハトにあるクノール家の家庭で最初に奴隷にされた使用人」でした。後に彼はスラパティという名前を名乗り、東インド会社に対抗して武装しました。現在、彼はインドネシアの国民的英雄です。それが、2021年にアムステルダム国立美術館で開催された奴隷制展でこの絵が目立った理由の1つでした。

3. 音楽：時代を超えた共鳴

作曲家、望月京は、コルネリア、キラナ、そしてスキャンロボット、それぞれのキャラクターに合った独自の音楽言語を創り出しました。17世紀、21世紀、そして未来の時代、それぞれの時代が持つ精神を音楽の中に息づかせています。彼女の音楽は、東西の音楽的対話を生み出すことで知られており、「おてんば」においても、その才能が遺憾なく発揮されています。単に物語を彩るだけでなく、登場人物たちの感情を深化させ、観客を作品の世界へと引き込みます。パリの現代音楽の重要なセンターであるIRCAMのアーティスト・イン・レジデンスとしてのさまざまな経験を豊かに活用した表現法で、時間軸、基本的な音楽の脈動、つまり潜在意識の存在、渦のような生命力の明白な拍動をつくりだし、3人の登場人物の魔法のような出会いを推進します。

4. 舞台のコンセプト：光と影の交錯する空間

オペラ「おてんば」の舞台は、光と影の繊細な相互作用を通して、登場人物たちの心の動きを表現します。日本の伝統的な暖簾や画家のキャンバスといった要素を取り入れることで、東洋と西洋、過去と現在が交錯する独特の空間が創出されます。また、舞台の中央に置かれたアンサンブルは、登場人物たちが集い、対話する場であり、同時に、彼らが自分自身を見つめ直すための鏡のような役割を果たします。光は、登場人物たちの感情や思考を可視化し、物語に深みを与えます。

5. 照明：キャラクターを照らす光

照明デザイナーのヘ・ウェフマンは、各キャラクターに異なる光を当て、その個性を際立たせています。コルネリアには白い能面のイメージを重ねた光、スキャンロボットにはデジタルな光、そしてキラナには修復スタジオの昼光を模した光が当てられます。これらの光は、それぞれのキャラクターの背景や内面を象徴し、物語に奥行きを与えます。

6. 舞台美術/暖簾：空間を分割し、繋ぐ

舞台美術デザイナーのハニー・ファン・デン・ベルクは、竹とキャンバスで作られた暖簾を用いて、空間をダイナミックに変化させます。暖簾は、東洋の伝統的な要素でありながら、現代的な解釈を加えることで、オペラのテーマである「変化」を視覚的に表現しています。暖簾は、登場人物たちの動きを制限したり、逆に自由な空間を与えたりすることで、物語の展開を効果的に演出します。また、暖簾は、異なる文化や時代を象徴する要素としても機能し、舞台全体の雰囲気豊かにします。

7. 衣装：文化的アイデンティティの探求

衣装デザイナーのリサ・コンノ（2018年グッチデザイン賞受賞者）は、オランダと日本の文化を融合させた独創的な衣装をデザインしました。彼女の作品は、常に人間の身体と衣服の関係を探求しており、「おてんば」においても、登場人物たちの内面を反映した衣装を創り上げています。コルネリア、キラナ、そして他の登場人物たちの衣装は、それぞれが抱える複雑なアイデンティティを象徴し、物語に深みを与えます。オランダ人の母親と日本人の父親の間に生まれたりサ・コンノにとって、文化的アイデンティティは彼女の作品の中で常に繰り返される重要なテーマです。

【監督のビジョン】

「生命力あふれる舞台へ」私のビジョンは、オペラ「おてんば」の登場人物たちに生命を吹き込み、彼らの内なる声を舞台上に鮮やかに描き出すことにあります。登場人物たちの心の動きを、歌声、身体表現、そして舞台装置によって鮮やかに描き出し、観客に忘れられない感動をもたらすでしょう。

1. 歌声と身体性：心の奥底からの表現

私は、歌と身体表現を、登場人物たちが自分自身を表現し、世界と対話するための最も強力な手段と考えています。コルネリア、キラナ、スキャンロボットのそれぞれが、歌声と身体の動きを通じて、自分たちの複雑な感情や思想を表現します。特に、コルネリアの自由を求める強い意志や、キラナの保存家としての使命感などは、歌声と身体の動きによってより鮮やかに描き出されます。

2. 多様性と対立：個性の輝き

登場人物たちは、それぞれ異なる背景を持ち、異なる価値観を持っています。この多様性が、舞台上で美しい対立を生み出し、観客を魅了します。コルネリアは、過去の束縛から解放されたいと願う一方で、自身の遺産を残したいという複雑な感情を抱えています。キラナは、伝統的な保存の価値と、新たな視点からの解釈の必要性の間で揺れ動きます。スキャンロボットは、人工知能としての客観的な視点と、人間的な感情との間で葛藤します。これらの対立が、登場人物たちの個性を際立たせ、物語に深みを与えます。

3. 動きと静止：生命力と静けさのバランス

私は登場人物たちの動きに特に注目しています。コルネリアは、長年の束縛から解放され、自由に動き回りたいと願います。キラナは、保存家としての仕事柄、静止した姿勢を要求されることが多いですが、内面には強い意志と情熱を持っています。スキャンロボットは、機械としての動きと、人間的な感情を表現する動きを併せ持ちます。これらの動きと静止のバランスが、舞台に躍動感と静謐さを同時に与え、観客の心を揺さぶります。

4. 音と光：多様な表現

音楽と照明は、登場人物たちの感情を視覚化し、聴覚的に表現する上で重要な役割を果たします。それぞれのキャラクターに合わせた音楽と照明によって、舞台はより豊かになります。

【企画制作】

シアター・アドホック財団（制作） www.theateradhoc.nl

オノ・エフライム/シアター・アドホック財団（事業/経理） www.theateradhoc.nl

【後援】

オランダ王国大使館

【日本事務局】

株式会社 Kailynart <https://airartcommunity.com>

お問合せ：

取材のご依頼、日本公演開催のご相談、ご寄付に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

株式会社カイルンアート（Kailynart） 担当：内倉・佐藤

Email: cs@airartcommunity.com Tel : +81-70-2795-3177

<https://airartcommunity.com>

12 April 2025